
ジャックとスリーピングビューティー

雨永祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャックとスリーピングビューティー

【Nコード】

N2612F

【作者名】

雨永祭

【あらすじ】

四六時中おねむな美人の主人公が目覚めると、目の前にいたのはハロウィンの名物かぼちゃ『ジャックオーランタン』を頭に被った人物でした。《お祭り女シリーズ》第一弾です。

（前書き）

登場人物は皆高校二年生です。

「起きて下さい」

目が覚める。

目の前一杯のかぼちゃ。

……何の悪夢だ。

心の中で突っ込んで、再び目を閉じた。

「あぁっ、寝ちゃダメですよ！」

ユサユサと揺すられて、仕方なく目を開ける。

……かぼちゃがいる。

正確にはハロウィンの名物かぼちゃのジャックオーランタンを被った女子。

この上なく異常な光景だ。

まあ、取りあえずする事は一つだ。

「へ？」

かぼちゃを鷲掴みにして向きを反転。

「ひゃわっ！？ 前が……」

そして、持っていた枕で殴った。

「きゃんー!!」

かぼちゃ、いや、ここはジャックと仮称するでしょう。ジャック

はえらく可愛らしい声で尻餅をついた。
黒のTバック。

「いやいや、学校に着てくる下着じゃないだろ……」

思わず、突っ込んでしまった。

「うひゃうっ！」

ジャックは慌ててスカートを押さえつける。
やれやれ、だ。

「おい、ジャック」

「ジャック？」

ジャックはかばちやを直しながら首を傾げる。可愛さの欠片も無い。
い。

「あんたのことだ。なぜ、俺の眠りの邪魔をした。返答しだいでは……」

ジャックは動きを止めて俺を見る。なにやら困惑してるように見える。

「……その、手紙を読んでここにいるんじゃない……」

「手紙？ 何のことだ？ 俺はここが日当たりも良く、人がほとんど来ないからここで寝てただけだ。それに、俺は茶道部の部長だぞ」

ちなみに、説明は遅れたがここは茶道部の部室だ。人が来なく、俺が開けっ放しにしているせいかな告白スポットの一つとなっている。

俺がよく部室の押し入れで寝ているせいかな誰も使っていないんだと生徒の多くは思っているらしい。

ともあれ、俺の言葉の後には沈黙がしばらく続いた。

「……」
「……」
「……」
「……」

動揺してるのが手に取るようにわかる。なんというか、ジャックの雰囲気は分かり易い。どうしようと思っっているのがひしひしと伝わってくる。

更なる沈黙。

「……」
「……」
「……」
「……」

そして、

「……ハ、ハローウィンだからっ！ trick or treatでっ！ お菓子を下さいで！ い、悪戯しちゃうからっ、だからっ、起こし、」

再び、かぼちゃを鷲掴みにする。
そして、シエイクっ！

「ヒヤアアアアー！！」

一心不乱にかぼちやを揺する。下らないことで心地好い一時を邪魔されたのだ。この怒り、晴らさでおくべきか！
シェイクしだして少し、部室の扉が開いた。

「やあ、待たせてしまったね！」

そこにいたのは悪友の富樫智弘。とがしともひろ一言で言い表せば愚か者だ。
無駄に格好付けて現れた馬鹿は俺とジャックを見て、アホ面を晒した。

「……何してんの？」

「見てわからんか、こんこんちきのすつとこどっこい」

どっからどう見ても、俺がジャックの頭を掴んでるだろう。それ以上でも以下でもあるまいて。

「わかるかよ……。それより、」

言いながら辺りを見回す智弘。

「ここに、可愛い女の子は来てないか？」

智弘の手には何やら可愛らしい紙が握られていた。

「ここにいるの女子はジャックだけだ」

そうやってジャックを智弘の前に突き出した。すると、

「ぬあああああっ！！」

「！！！？」

「なあっ!？」

ジャックは突如、素っ頓狂な叫びを上げて智弘から手紙を引った。智弘が何か言おうとする前に、ジャックは一言。

「これっ、私が出したのっ！」

「は……？」

「ごめんなさい、入れる下駄箱間違っちゃって……。だから、えーと、あなたに用はないんです。ごめんなさい」

……その一言は酷かるうよ。

かばちやに用なしと言われた男って、どうなんだろうな。それと、ぬか喜びも甚だしかったな、智弘。

「女なんてっ、女なんて~~~~~っ！」

泣きながら部室を飛び出した。

ジャックはというとひたすらに困惑していた。

やれやれ、天然なのか。悪意の無いってのはエグいものだな。

「ジャック、もっと考えて喋るべきだ」

「あっ、ごめんなさい……」

「謝るならば俺ではなく、智弘に謝るんだな」

「そうだよね……」

何やら落ち込んでるように見える。

すぐにへこむ奴だな。

そっいえば、

「さっき言ってた手紙って、もしかしてそれか？」

「えっ！？ えー……」

再び、沈黙が流れた。
本当に面倒な奴だな。

「はつきりと言え。さっきみたいな誤魔化しもいらん」

俺は早く惰眠を貪りたいんだ。
ジャックは暫く俯き、そして顔を上げた。

「あのっ、私っ！」

「ちよっと待て、ジャック」

忘れるところだった。

「今更と言えば今更だが、顔を隠したままというのはどうなんだ？」
「あっ、すいません、スリーピングビューティーさん。つつかり」

今、なんて言ったこのかぼちゃは。文句を言おうとして、俺は息を飲んだ。

ジャックは大層な美少女だった。それも、黒く長い髪の似合う。
はつきりと言おう。完璧に俺の好みの容姿だ。見た目だけなら大和撫子といった感じだ。

いやはや、何だっつかばちゃを被っているのか……。
とにかく、ジャックは顔を朱に染めて、俺を正面から見つめる。
そして、先程の続き。

「私っ、あなたが、スリーピングビューティーさんが好きです！
私とお付き合いさせて下さいー！！」

「ジャック……」

好みの容姿の女性の恥じらいながらの愛の告白というものは、なんとまあ、どうしてこうも破壊力が凄まじいのだろうな。

俺も男だ。

二つ返事で了承した。

俺は頭をジャックの膝の上に寄せながら尋ねる。

「なあ、ジャックよ」

「何でしょうか、スリーピングビューティーさん」

「そのスリーピングビューティーというのは止めてもらえると有り難いのだが……」

ジャックは再びをかぼちやを被っていて表情はわからなくなっているが、雰囲気はどこかいたずらっ子のような。

「だって、四六時中おねむの美人さんだもの。それに、私の名前だって、ジャックじゃないです」

「うむ、もつともな話だな。それに、言われてみれば名前も知らない。」

「そういえば、互いに自己紹介をしていなかったな。俺は戸宮尋だ。とみやひろスリーピングビューティーとは呼ばないでくれ」

「私は春夏秋冬とお祭りで春夏秋冬祭です。しゅんかしゅうとうジャックではないです。ひととせまつりからね」

「何ともめでたい名前だな、一年中祭りか。」

「騒がしそうな名前だな」

「えへへ、名は体を表すを地で行ってます」

さて、自己紹介も終えたところで、ずっと後回しにしていた疑問を尋ねることにする。

「ところで、結局その被ってるジャックオーランタンはなんなんだ？」

祭の返答は簡潔だった。

「だって、今日はハロウィンです！」

つまるところ、ジャックこと春夏秋冬祭という俺の彼女は名前通りの女で、それ以上でも以下でもないらしい。

変なのに捕まってしまったな……。

俺は、しみじみとそう思いながら祭の膝枕で夢の国へと旅立った。

（後書き）

イメージしてみよう、無駄に美人な男と顔がジャックオーランタン（かぼちゃ）の女が会話している風景を。ちなみに、背景は畳部屋です。

……意味不明過ぎる。

おねむな美人の尋くんと年中お祭り天然変人美少女の祭ちゃんの物語は続きます。基本的にイベント時期のお話がメインです。そこで祭ちゃんが毎回コスプレします。まあ、可愛い格好はさせないけどね！

次はおそらくクリスマス。さて、何のコスプレにしようか。

評価や感想、批評等をお待ちしております。

こんな駄文を読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2612f/>

ジャックとスリーピングビューティー

2011年1月26日01時25分発行